

コーパスに基づく多義語の分析

ー 日本語「読む」とドイツ語 lesen を例として ー

井 口 靖

要 旨

本稿の目的は、日本語とドイツ語のコーパスを用いて多義性のメカニズムを探ることにある。例として日本語の「読む」とドイツ語の lesen を取り上げ、それらのコロケーションを調査し、それぞれがどのような多義構造をなしているかを検討した。日本語の「読む」にはさまざまな語義が認められるが、それは書かれたものの知覚から理解を経て音声化までの一連の流れとしてとらえることができ、その一部分が焦点化されたものが語義となっている。また、「読む」では書かれたもの以外もその対象となっている。一方ドイツ語の lesen は対応する流れの範囲が狭く、日本語ほどの多義が生じていない。

0. はじめに

ソシュールの言い方を借りれば「言語記号が結びつけているのは（中略）概念と聴覚映像である。」（ソシュール 2016：100）これが対一対の関係なら単純な話であるが、一つの聴覚映像に複数の概念が対応する場合、すなわち多義語も多い。これは限られた言語記号で複雑な現実世界を表現しようとした必然的な結果であろうが、記憶の負担という観点からはそれは決して軽減を意味するものではない。むしろ伝達された側には解釈の負担が増え、伝達システムとしてははなはだ効率が悪い。

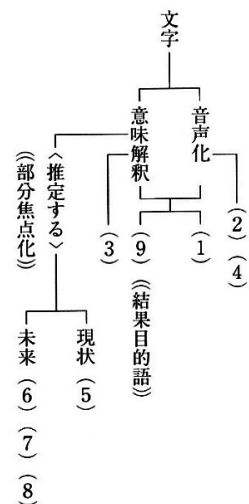
そもそも多義というのはどういう構造をなしているのだろうか。言語の効率性という観点からはそこになんらかの法則性のようなものがあるのかもしれない。

ここでは、日本語の「読む」とドイツ語の lesen を中心に多義性のメカニズムの一端を探る。その際、コーパスを用いてコロケーション分析を行う。将来的には独和辞典記述に反映することを目指すので、多義語の記述の問題点についても触れておく。

1. 1. 「読む」の多義性

国広（2006：305）は「読む」は古くは「かずを数える」という意味を持っていたとし、『明鏡国語辞典』（大修館書店、2002）の用例に基づき多義性の構造を右のように図示している。（用例の数字は図の数字に対応する。）

- (1) 大声で教科書を読む
- (2) 門前の小僧習わぬ経を読む
- (3) 小説を読む



「読む」の多義体系図

- (4) この字は何と読むのだろう
- (5) 相手の心を読む
- (6) 株価の動きを読む
- (7) 票を読む
- (8) 十手先まで読む
- (9) 和歌を読「詠」む

まずは、NINJAL-LWP for BCCWJ¹を用いてこれを検証してみよう。「読む」対象となるものを探るために、「…を読む」というコロケーション²に現れる名詞の分類を試みる³。

掲載物（書籍・新聞等）⁴：本、新聞、手紙、書、雑誌、書物、本書、資料、誌、テキスト、教科書、著書、書類、集、ノート、文書、朝刊

種類：記事、小説、作品、漫画、詩⁵、続き、論文、聖書、原稿、絵本、日記、物語、原作、メール、経、説明、文献、記録、質問、ブログ、解説、ニュース、エッセー、情報、コメント、メッセージ、文学、書き、回答、録、伝記、弔辞、作文、名前、欄、ヘルプ、著作、データ、原文、問題、規約

言語：英文、英語

言語単位：文章、文⁶、文字、言葉、字、漢字

量：ページ、部分、章、字、冊

著者：【人名】

内容：内容、中身

創作物（結果目的語を含む）：歌、句

言語以外：先⁷、心、空気、動き、目盛り、【組織】⁸、心理、流れ、表情、

一般：もの、こと、の、話、【一般】⁹、何、ところ、（これ・それ）ら、箇所、あれ、等

熟語：鯖

記号を記号内容と記号表現の2面からなるものととらえるなら、「読む」のヲ格はその両面に関係する。言語の記号表現としては、掲載物、種類、言語、言語単位、量、著者がある。「目盛り」やここにはないが「楽譜」などは言語に近いものだろう。言語以外では「表情」も記号表現である。「動き」は「唇の動き」の場合には記号表現だが、「心の動き」となると記号内容である。「内容」「中身」は記号内容のように思えるが、これらは実際には次のような例¹⁰が多く、本文または内容物を指示し、記号表現にすぎない¹¹。

(1a) 問診票の内容を読んでみる。どんな質問事項があるのだろう。（日本外来小児科学会編『小児プライマリー・ケア虎の巻』2001, 493）

(1b) 新聞の見出しだけにふりまわされなくて、内容をじっくり読み、それを自分なりに分析するところに妙味増大のルーツがある。（松本亨『秘密の株式作戦』1978, 676）

(2a) その一つを手にとって、中身を読んでから、「最近、こんな手紙がよく来る」と、小万がっていました。（西村京太郎『京都感情案内』2005, 913）

(2b) アドレスしか知らない人に自分のメールの中身を読まれてしまう可能性ってありますか？（Yahoo! 知恵袋, 2005, インターネット）

一方で、言語以外とした「先」「心」「空気」「心理」「流れ」などは記号内容であるが、言語記号の内容でもそれ以外の内容でもありえる。

また、「歌」「句」など結果目的語を表すものも多いが、この場合には「詠む」という字が当てられ、単なる音読ではなく、作り出すことになる。

1. 2. 「読む」の多義性の構造

上で見たように、国広（2006：307）は「読む」をまず「音声化」と「意味解釈」の2面でとらえ、それを軸にさまざまな語義を関連付けている。ただ、そこではそれぞれの語義は独立的にとらえられ、その上で関連付けられている。私たちは「読む」という語の意味を習得する際に、これら意味を語義1、語義2、語義3…のようにひとつひとつ覚えていくのだろうか。それともなんらかの語義を中心にそれを広げていくのだろうか。

ここでは「読む」の語義をコーパス分析で行ったように記号という観点から整理しなおしてみる。言語にしる、言語以外のものにしる、そこに何らかの意味を見出した時、それは記号となる¹²。私たちが知覚できるのはその記号表現のみであるが、それを通して記号内容を理解する。

まずは、言語記号で考えてみる。国広（2006：307）は「字を読む」を音声化に位置付けているが、たとえば「うちの子はもう文字が読める」という場合には必ずしも音声を伴う必要はない。むしろ記号表現として知覚すると考えたほうがよいだろう。また、「小説を読む」は意味解釈に位置付けている¹³が、それは記号表現を知覚した結果である。すると、「読む」には記号表現の知覚を経て記号内容の理解まで及ぶ意味があると考えることができる。ただし、「読む」場合には理解は必ずしも必須条件ではなく、単なる読み上げでは、言語記号の視覚上の記号表現から聴覚上の記号表現への「転換」ということになる。たとえば「名前を読む」では内容の理解を伴わないことは明確である。

音声化される場合でも「和歌を詠む」のように結果目的語をとった場合には単なる音声化ではなく、記号内容を伴っている。つまり、頭の中で考えたことを音声化することになる。記号表現を記号内容に結びつける作業が「理解」ならば、これは記号内容を記号表現に結びつける逆の作業（「創出」と呼ぼう）と考えられる。

言語記号の場合、次ページのような流れを想定できる。中央の楕円は頭の中の作業と想定する。音読の時には「知覚→理解→音声化」がフルに活用されるのであろうが、黙読の場合には理解まででとどまる。また、知覚された記号表現が場合によっては「理解」を経ずに音声化される場合もあるが、この場合も頭の中で記号間の「転換」が行われる。「創出」の場合には知覚の部分がない。つまり、この流れの中でどの部分を焦点化¹⁴するかによって、異なる語義が生じ、結果として多義となっていると考えられる。

言語記号以外では「表情」など記号表現の数は少ないが、次のように「先」「心」「空気」「心理」「流れ」などで言語記号以外の記号内容を「読む」ことは多い。「空気を読む」ではまさに言語にならないものを読んでいるのだろう。

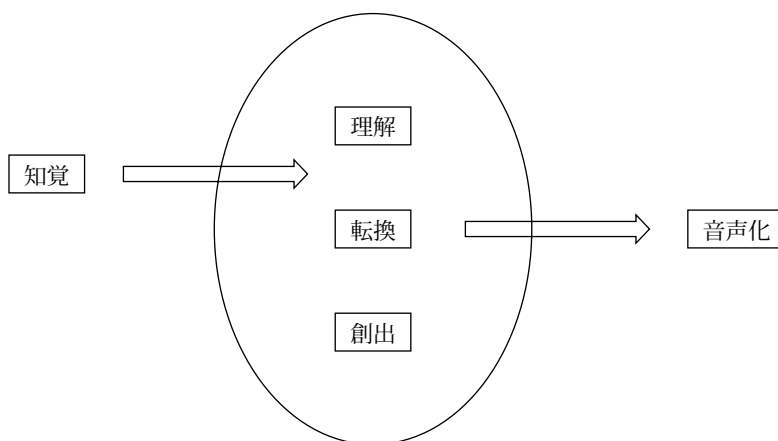
(3a) 投資の成功のためには先を読む力を養うことが不可欠。(ダカーポ, 2005, 一般)

(3b) 小太郎は黙っているイガの心を読んだ。(岩崎正吾著『はるかな武田騎馬隊』2001, 913)

(3c) 内省→沈黙→場の空気を読む(重要)(Yahoo! ブログ, 2005, 健康、病気、ダイエット)

(3d) 片付けだけでしたら簡単なんです、全ての物たちをお嬢様の行動心理を読んでのセッティング… (Yahoo! ブログ, 2008, 住まい)

(3e) その経験で少しは、試合の流れを読むようになった感じがします。(Yahoo! ブログ, 2008, スポーツ)



言語記号以外のものを上の流れにあてはめて考えると、そもそも記号内容は知覚できないので、「心を読む」という場合には何か知覚できるもの（記号表現）に基づいて「心を理解する」ということになるが、知覚されたもの（「表情」など）はふつう音声化されることはない。つまり、「読む」の対象は基本的に言語記号の記号表現であるため、言語記号以外の場合には「理解」が焦点化され、ヲ格が記号内容になる場合が多いものと思われる。

以上見たように「読む」の場合には知覚から音声化までの一連の流れがあり、部分的な焦点化のために多義が生じている。そして、どこが焦点化されるかによってヲ格が異なり、それが記号受信者の理解を助けることになる¹⁵。

2. lesen の多義性の構造

それではドイツ語の lesen はどのような多義性をもっているのだろうか。まず辞書記述から見てみる。DUDEN の Universalwörterbuch には次のように記載されている。

1. a. etwas Geschriebenes, einen Text mit den Augen und dem Verstand erfassen
b. vorlesen, lesend vortragen
c. regelmäßig Vorlesungen halten
d. <l.+sich> in einem bestimmten Stil geschrieben sein und sich entsprechend lesen (1a) lassen
e. <l.+sich> [unter Mühen] ein umfangreiches Werk bis zum Ende lesen (1a)
2. etwas aus etwas erkennend entnehmen
3. (EDV)(vom Leser 2) Daten aus einem Datenspeicher od. -träger entnehmen

ここでは再帰代名詞を伴う 1d, e と電子機器に関する 3 は除外しておくとして、1 は言語記号を「読

む」ことで、1a は知覚から理解に対応し、1b, c は音声化に対応している。2 は言語記号以外のもので、例として次のようなものがあがっている。「非難」「疑い」「不機嫌」「考えていること」「考え」など記号内容が目的語になることを示している。

aus jmds. Zeilen einen Vorwurf, gewisse Zweifel l.
in ihrer Miene konnte man die Verbitterung l. (jmds. Blick zu deuten versuchen)
aus seinem Blick, Gesicht war deutlich zu l., was er dachte
Gedanken l. (erraten) können

lesen については NINJAL-LWP for BCCWJ と同様に自動的にコロケーションを分析して示してくれる DWDS の Statistische Auswertungen¹⁶ を用いて調べてみる。以下は頻度で 100 位までを対格目的語の種類で分類したものである¹⁷。日本語と同様に分類する¹⁸。

掲載物（書籍、新聞）：Buch, Zeitung, Brief, Werke, Akten, Zeitschriften, Dokumente, Tageszeitung, Blatt, Karten, Spiegel¹⁹, Schild

種類：Artikel, Geschichte, Roman, Gedichte, Bericht, Namen, Nachrichten, Messe, Interview, Beitrag, Bibel, Erzählung, Literatur, Kritiken, Tagebuch, Drehbuch, Kommentare, Biographie, Rede, Prosa, Manuskript, E-Mails, Lyrik, Spiel, Meldung, Märchen, Schlagzeilen, Krimis, Aufsatz, Anzeige, Titel, Verse, Koran, Auszüge, Übersetzung, Comics, Essay, Kolumne, Erklärung, Inschrift, Überschrift, Protokoll, Botschaft, Korrektur, Rezensionen, Namen, Beschreibung, Daten, Reportage, Aufsätze, Leitartikel, Äußerungen, Spruch, Aufzeichnungen, Analysen, Autobiographie, Novelle, Zitat

言語単位：Texte, Satz, Wort, Schriften, Zeichen, Kleingedruckte, Buchstaben

量：Zeilen, Seiten, Stück, Kapitel, Teil, Band, Passage, Absatz

著者：Klassiker, Autoren, Dichter, Schriftsteller

言語以外 Uhr, Gedanken, Noten, Bilanzen, Partitur, Erinnerungen

一般（代名詞）：sie, es, ihn

熟語：Leviten

その他：Tag, Morgen²⁰

「読む」とは異なり、lesen の目的語はほとんどが掲載物、種類、言語単位、量、著者など言語で書かれたもので、言語以外では、Uhr, Noten, Bilanzen, Partitur など言語記号に準じるものを除くと、Gedanken, Erinnerungen だけである。Gedanken は次のような例でこれが言語記号以外の記号内容であることは確認できる。

(4a) Wer etwa glaubt, die *Gedanken* seines Partners lesen zu können, für den wird im Kopf aus einem zufälligen Schweigen schnell ein Anlass für einen Ehestreit (Die Zeit, 15.12.2008, Nr. 50)

(4b) Der geheimnisvolle Künstler liest nämlich die geheimsten *Gedanken* der Zuschauer (Berliner Zeitung, 24.09.2004)

Erinnerungen については記号内容のようにも見えるが、次の例が示すように「思い出が書かれたも

の」という意味になり、上の分類の「種類」に入れてもよい。

- (5) In schlichter, beinahe kunstloser Sprache lesen wir die Zeugenaussagen und *Erinnerungen* der Nachbarn
(Die Zeit, 08.08.2007, Nr. 33)

なお、lesen は前置詞目的語をとることもあるので、それも調べてみる。前置詞ごとに整理する²¹。

in+ 掲載物 : Zeitung, Buch, Presse, Internet, Original, Ausgabe, Zeitschrift, Tageszeitung, Brief, Blättern, Medien, Spiegel, Tagebuch, Katalog, Programmheft, Akten, Geschichtsbüchern, Magazin, Volkszeitung

in+ 種類 : Bibel, Übersetzung, Artikel, Bericht, Roman, Rundschau

in+ 文字 : Schrift, Lettern,

in+ 文字以外 : Gesichtern

aus+ 掲載物 : Buch, Werken, Texten, Briefen, Gedichtband

aus+ 種類 : Roman, Tagebüchern, Gedichten, Erzählung, Biographie, Autobiographie, Bibel, Manuskript

von+ 掲載物 : Blatt

von+ 文字以外 : Lippen

auf+ 掲載物 : Seite, Plakaten, Schild, Papier, Bildschirm, Transparent, Tafel, Homepage

an+ 掲載物 : Wand, Bildschirm,

ここでもほとんどが書かれた言語記号が対象となっているが、Gesicht, Lippen なども見受けられる。

- (6a) So richtig kann man *in seinem Gesicht* auch nicht *lesen* (Der Tagesspiegel, 24.11.2002)

- (6b) Malu bekam ein Hörgerät, lernte Gebärdensprache und *von den Lippen* zu *lesen* (Die Zeit, 25.04.2013, Nr. 17)

以上見てきたように「読む」に比べて lesen はその対象が限られ、特に Universalwörterbuch の例にあるような言語記号以外のものは頻度が低い。また、「歌」のような結果目的語をとることもない。つまり、「読む」で示した流れで言えばその範囲が狭く、かつ言語記号以外もとりにくいので実際の多義性はそれほど高くないと言える。ドイツ語の場合、音声化することは *vorlesen*, *rezitieren* などの別の動詞で表現し、創出も *verfassen*, *schreiben* などを使うようである。

3. 多義語の記述

ここでは「読む」と lesen を例にとって、その多義性の違いを示した。最後にその多義性を記述する場合の問題点に触れておこう。

NINJAL-LWP for BCCWJ は「基本動詞ハンドブック」で多義語の「中心義」を設定している。

多義動詞には、まず中心となる意味（中心義あるいは基本義）があり、そこから様々な意味が派生されます。例えば、動詞「上がる」には、「上の方への物理的な移動」という中心義があります。

(<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)

その「中心義」となる条件として赤瀬川・プラシャント・今井（2016：122f.）は次のようなものをあげている。

- 1) 共起語の頻度が高い
- 2) 共起語の種類が多い
- 3) 文法の制限が少ない
- 4) 共起語が具体的である
- 5) 語義ネットワークの中心に据えると語義ネットワークが描きやすい

ただし、中心義は単純にコーパスで頻度を調べれば導き出せるというものでもなさそうである。たとえば「走る」でガ格の頻度が高いのは人や動物ではなく、「痛みが走る」「激痛が走る」などだと言う（赤瀬川・プラシャント・今井 2016：123）²²。

ドイツ語でも DWDS によると laufen の主語は代名詞を除くと Geschäft, Vertrag, Film, Verhandlung, Vorbereitung, Gespräch, Ermittlung, Verfahren などが上位に来る。

日常では中心義と考えられるものよりも頻度が高いものを耳にしながら、それでも中心義を習得していくのだろうか。

辞典に記述する場合には中心義を最初に示すほうが体系的な記述ができそうである²³が、一方で、辞典の使用者が実際に接するのは頻度の高いものかもしれない²⁴。中心義から記述するとその時知りたいた語義が後の方に出てくる可能性もある。逆に頻度の高い順に並べたとすると検索としては効率的かもしれないが、語義が関連性なく並んでいるため辞典の使用者はその語の全体像をつかむのに苦労することになる。

紙の辞典は全体が見渡しやすいので語義を体系化して示し、電子辞典は効率を重視して頻度で並べる、あるいは、利用者の目的により並べ替えができるようにする、という方法もありえる。

【註】

本研究は JSPS 科研費 JP16K02667 の助成を受けたものです。

1 <http://nlb.ninjal.ac.jp/search/>

2 「読む」は 20142 例で、このうち「…を読む」は 8208 例あり、1087 種類の名詞があるとされている。（2016 年 11 月 20 日現在）

3 リストはそれぞれの項目で NINJAL-LWP for BCCWJ の頻度順に従う。

4 「掲載物」は原則として手にとれるものと考えたが、その意味では「種類」とした「聖書」「絵本」「日記」などは「掲載物」とも言える。逆に「掲載物」に分類している「手紙」は「種類」でもありえる。いずれにせよ、厳密な分類は不可能なので、おおまかな傾向を見るためのものとお考えいただきたい。

5 「詩」の場合には「読む」が多いが、「歌」の場合には「詠む」がほとんどである。

6 「文」はしばしば「種類」になる（「感想文」「問題文」など）。

7 「先」は次のように言語記号と見なすべき例も多い。

それからまた手紙の先を読みはじめた。（フラン・オブライエン著；大澤正佳訳『ハードライフ』，2005，933）

8 【組織】は「日経新聞」などの会社名が多い。

- 9 【一般】は「日本書紀」などの作品名が多い。
- 10 日本語もドイツ語も例はいずれもそれぞれのコーパスから引用している。
- 11 たとえば「本の内容を読む」と言った場合、本を開くことが想定され、内容を理解する意味では「本の内容を読み取る」のように言う必要があろう。
- 12 池上（1984：5）は「人間が『意味あり』と認めるもの、それはすべて『記号』になる」と述べる。
- 13 国広（2006：307）によると「小説」は記号内容ということになるが、「小説を買う」という場合には「小説」は書籍の一種であり、また「小説の内容を理解する」と言えるが「小説の内容を読む」とは言えないことから単純に小説を記号内容と見なすわけにもいかないだろう。
- 14 国広（2005：31）は動きのとらえ方として「その継続中の部分に焦点を当ててとらえる『未完アスペクト』と「動きが終了した段階に焦点を当てて捉える『完了アスペクト』」があるとしているが、ここで「焦点を当てる」というのは「ラネカー（Langacker）の言う‘profile’と同じ」だとしている。ここでも同様に考えられるだろう。
- 15 同様の流れが同じように知覚に関わる動詞「聞く」にも想定できる。NINJAL-LWP for BCCWJ は「基本動詞ハンドブック」を公開しているが、そこでは「聞く」に次のような多義を認めている。

- ①聴覚によって音・声を感知する
- ②ひとまとまりの音や発話に意識を向け、捉える
- ③情報に接する
- ④主観が含まれる意見や感情に耳を傾ける、受け止める
- ⑤他の人の言うことを受け入れ、それに沿うような行動をする
- ⑥不明な事柄の情報を求める

(<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/kiku/>)

「聞く」には「見る」に対する「読む」のような語がないために、さらに範囲が広がっているように思われる。これについては次のような流れにできよう。

尋ねる⑥ → 知覚①②③ → 理解④ → 行為⑤

「聞く」の場合には「知覚」に基づく「理解」の結果として「音声化」ではなく、「行為」（たとえば「言うことを聞く」）となっている。「音声化」だと同じ知覚記号を使うことになる。また、「読む」とはちがって知覚の前提となる行為「尋ねる」（たとえば「道を聞く」）というところまで語義が広がっている。このように流れの前方への拡大ということも可能性として出てくる。

16 <https://www.dwds.de/stats>

17 logDice 100 位までの総数は 57240 例。(2016 年 11 月 21 日現在)

18 リストはそれぞれの項目で DWDS の LogDice の順位に従う。

19 Spiegel は普通名詞で「鏡」だが、ここではドイツの雑誌名。

20 Tag, Morgen は副詞規定。

Jeden Tag lese ich in der Zeitung, ...(Die Zeit, 01. 11. 2010, Nr.44)

Aber heute Morgen lese ich in der Zeitung, dass ...(Die Zeit, 17.10.2011, Nr. 42)

21 実際には zum Beispiel などの熟語や mit Interesse などの様態の副詞規定が多く、これらは省略した。

22 ハ格になると人が多くなるという（赤瀬川・プラシャント・今井 2016：123）。ハ格は、文の主題、旧情報となっている可能性が高く、行為者よりむしろ行為が問題になっていると考えられる。その意味で「普通である」、つまり「中心義」と言える。一方、ガ格は逆に情報価値が高いためにむしろ比喩的な用法で用いられるのかもしれない。

23 国広（1997：209）は「意味関係が十分に捉えられていないと、多義の意味関係的体系化は成功しない」とし、次のような意味関係を提示している。

- ①焦点移動
- ②具象化
- ③比喩的転義
- ④時空比喩
- ⑤時空推義
- ⑦推義
- ⑧プラス派生義
- ⑨上下関係派生義
- ⑩推論的派生義
- ⑪抽象化派生義

「推論的派生義」は「筆を執る」が次に来る行為の「書く」という意味を持つような場合であるが、ここでとりあげた「読む」の「理解」や「聞く」の「行動」もこれに含まれるだろう。ただし「道を聞く」はこれとは逆方向のいわば「前提」を派生したことになる。

24 外国語の初級者が使用する教科書も必ずしも現実の頻度を反映しているとは言えないかもしれない。その意味では学習辞典は別の問題となる。

【参考文献】

- 赤瀬川史朗／プラシヤント・パルデシ／今井新悟（2016）『日本語コーパス活用入門 NINJAL-LWP 実践ガイド』大修館書店
- 池上嘉彦（1984）『記号論への招待』岩波書店
- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店
- 国広哲弥（2005）「アスペクトと認知と語義 ―日本語の様態副詞と結果副詞を中心として―」（武内道子編『副詞的表現をめぐって ―対照研究―』ひつじ書房、29-46）
- 国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞 理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店
- フェルディナン・ド・ソシュール（町田健訳）（2016）『新訳 ソシュール 一般言語学講義』研究社
- Duden Deutsches Universalwörterbuch 6. Auflage. Bibliographisches Institut. 2007.

Eine korpusbasierte Analyse der Polysemie - Am Beispiel des japanischen Verbs *yomu* und des deutschen Verbs *lesen* -

Yasushi INOKUCHI

Zusammenfassung

Ziel dieser Abhandlung ist es, Polysemie korpusbasierend zu analysieren. Als Beispiele werden hier das japanische Verb *yomu* und das entsprechende deutsche Verb *lesen* behandelt.

yomu hat mehrere unterschiedliche Bedeutungsvarianten, diese können aber in der Abfolge ‚Wahrnehmung des Geschriebenen - Verstehen des Inhalts - Artikulation beim Vorlesen‘ korrekt erfasst werden, indem dabei jeweils ein Teilaspekt der möglichen Bedeutung in den Fokus gebracht wird. So kann sich *yomu* neben Geschriebenem auch auf andere *wo*-Kasusobjekte (Akkusativobjekte) beziehen, wie z.B. *kokoro* (das Herz) oder *saki* (die Zukunft). *yomu* erscheint somit als mehrdeutig, wohingegen *lesen* durch seinen stärkeren Bezug auf Geschriebenes nur einen engeren semantischen Bereich absteckt.